

教育研究業績書

2025年10月20日

所属：日本語日本文学科

資格：准教授

氏名：野畠 理佳

研究分野	研究内容のキーワード	
日本語教育学	日本語教育、自律学習、学習動機、異文化間コミュニケーション	
学位	最終学歴	
修士（言語・文化学）	大阪外国语大学大学院 外国語学研究科 日本語学専攻	

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1. 高年級総合日本語 下巻	2015年6月	総主編：彭広陸、守屋三千代 本冊主編：応杰、秦剛、百留康晴、編者：丁莉、何琳、劉健、孫佳音、王軼群、今井寿枝、遠藤織枝、岡智之、押尾和美、野畠理佳、百留恵美子、平高史也（北京大学出版社）
2. 高年級総合日本語 上巻	2014年1月	総主編：彭広陸、守屋三千代 本冊主編：応杰、秦剛、百留康晴、編者：丁莉、何琳、劉健、孫佳音、王軼群、今井寿枝、遠藤織枝、岡智之、押尾和美、野畠理佳、百留恵美子、平高史也（北京大学出版社）
3. 総合日語 第三冊 (改訂版)	2010年8月	改訂に際し、日本側総主編として執筆協力
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. Microsoft Office Specialist (PowerPoint 2010)	2015年6月29日	合格
2. Microsoft Office Specialist (Word 2010)	2015年6月27日	合格
3. ACTFL Oral Proficiency Tester	2001年6月5日 テスター資格最終更新：2007年4月23日	アメリカ外国語協会認定インタビューによる外国語口頭運用能力判定試験官資格
4. 日本語教育能力検定試験	1995年3月23日	合格
5. 中学校教諭 第1種教員免許	1994年3月31日	国語科
6. 高等学校教諭 第1種教員免許	1994年3月31日	国語科
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 国立国語研究所 2004年度上級研修		修了

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
3 学術論文				
1. 日本語教師による オートバイオグラ フィーの実践と考察 —日本語教師の「こ とば」をめぐる経験 の語りから— (査 読付)	共	2025年9月刊 行予定	『第 13 回国際日 本語教育・日本研 究シンポジウム論 文集』	「ことば」を教育対象として扱うという日本語教師の特性に着目し、ある日本語教師が自身の内的キャリア形成をどのように捉えていたかを、「言語ヒストリー (LH)」と「言語ポートレイト」によるオートバイオグラフィーとしての語りを観察することで考察した。その結果、ことばをめぐる様々な経験の中で日本語教師としての内的キャリアが変容していたことが明らかとなった。実践においては、経験を肯定的、共感的に解釈したピアが重要な役割を果たしていたが、ピア自身も LH、言語ポートレイトの語り手を経験していくことがIの経験の解釈にプラスに影響している可能性も示唆され

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
2. 日本語教育とAIの キヨウソウを考える	共	2025年7月	『日本語プロフィ シエンシー研究』 第 13 号 (日本語 プロフィシエン シー研究学会) pp. 7-23	た。 執筆者：和泉元千春、野畠理佳、小林浩明 共同研究者：上田和子 教育現場において生成AIの利用が進んでいるが、このような状況を 日本語教師がどのようにとらえているかを調査するため、アンケート調査を実施した。その結果、生成AIを利用する教師が7割を占め、 使用に関して倫理的な問題に不安を感じているもの、生成AIの登 場をプラスに捉えていることがわかった。アンケート結果を踏まえ て生成AIとの共存に向けての課題について考察した。 執筆者：伊藤亜紀、北川幸子、住田哲郎、野畠理佳
3. 日本語学習動機研究 の動向 一質的研究を 中心に— (査読付)	単	2024年9月	『日本大学大学院 総合社会情報研究 科紀要』 第25巻 第1号 pp.85-100	日本語学習動機研究は第二言語学習動機研究に影響を受けながら発 展してきた。過去の日本語学習動機研究の動向論文からは、質的研究の不足と研究への参加者が限定されていることが指摘されてき た。本稿は日本語学習動機研究の動向を把握するため、CiNii Researchにおいて1992年から2022年において日本語学習動機研究の 論文を抽出したが、そのうち65が質的研究であることがわかった。 質的研究の成果として、社会的に埋め込まれた学習動機の発達を捉 えることに貢献しているが、第二言語習得研究における社会的転回 (ソーシャル・ターン) の影響はまだ十分ではない。
4. 2023年度日本語教育 関連活動の報告およ び「コロナ禍」前後 における教育実践の 検証	共	2024年4月	『武庫川国文』 96 号 pp. 47-62	2023年度の日本語教育関連科目における諸活動についての報告。コ ロナ前からコロナ期であった2018年～2022年の日本語教育関連活動 を振り返り、ポストコロナ期に入った2023年の活動をまとめた。 2023年度はオンライン交流会および対面での交流会を組み合わせて 交流活動を実施することができた。 執筆者： 上田和子、野畠理佳、林貴哉
5. ベトナム出身の留学 生が専門学校へ進学 する理由とは—留学 のプッシュ・プル要 因との関連から (査読付)	単	2023年12月 23日	『言語文化教育研 究』 第21巻 pp. 133 - 152	近年急増するアジア非漢字圏習習者のうちベトナムの習習者に焦点 を当てインタビュー調査を行い、なぜ専門学校へ進学したのかにつ いて、日本留学のプッシュ・プル要因と関連づけてうえの式質的分 析法により分析した。プッシュ・プル要因は多様であるが、来日後 には現実的な選択により理想自己の修正が迫られ、大学ではなく専 門学校を進路として選択するケースや、日本での就業経験という キャリア形成の近道として専門学校が選択されるケースが見られ た。
6. 2022年度 日本語教育 関連活動の報告	共	2023年3月 27日	『武庫川国文』 第 94号 pp. 66-80	概要：2022年度に実施した日本語教育関連活動の報告。資格関連科 目の活動およびオンラインを含めた交流会活動について報告し、そ の成果と課題について報告した。 執筆者：野畠理佳、上田和子
7. 留学中の日本語学習 動機とコミュニケー ション意欲の観察 —交換留学生のL2理 想自己、L2義務自己 をもとに— (査読 付)	単	2021年12月	『武庫川女子大学 紀要』 第69巻 pp. 11-19	担当個所：1, 3.1.1, 3.2.1, 3.2.2, 3.3.2, 3.4.1, 3.4.2, 4, 5 日本語を主専攻とする東アジア（中国および韓国）の交換留学生を 対象とし、留学期間中の日本語学習動機の変化の要因と、日本語コ ミュニケーション意欲との関連について、L2理想自己・L2義務自己 に着目しながらSCATによる分析を行った。
8. 2021年度前期 日本 語オンライン交流会 活動の実践	共	2021年8月 31日	『武庫川国文』 第 91号 (武庫川女子 大学国文学会) pp. 68-82	概要：2021年度前期に実施した日本語教育関連活動の報告。科目横 断的に実施したオンラインでの交流活動の特性と課題について報告 した。 執筆者：上田和子、野畠理佳
9. 2020年度日本語教育 関連活動の報告 -オ ンライン時代におけ る交流活動の実践と 検証-	共	2021年3月	『武庫川国文』 第 90号 (武庫川女子 大学国文学会) pp. 53-66	担当個所：2-2, 3-2を担当、5-2・3の一部 2020年度に実施した日本語教育関連活動の報告。オンラインでの交 流活動が中心となつたため、その成果と課題について報告した。 執筆者：上田和子、野畠理佳
10. 留学中の日本語学習 者的情意要因の観察 -コミュニケーション意欲の変化とその	単	2020年12月	『武庫川女子大学 紀要』 第68巻 pp. 11-19	担当個所：2-2, 3-3, 3-4, 3-5を担当、4の一部 日本語コミュニケーション意欲の変化にかかわる情意要因につ いて、交換留学生を対象としインタビュー調査を実施し、SCATにより 分析した結果を報告した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
要因- (査読付) 11.2019年度日本語教育 関連活動の報告	共	2020年3月 20日	『武庫川国文』第 88号 (武庫川女子 大学国文学会) pp. 64-76	2019年度の日本語日本文学科における日本語教育関連科目で実施し た活動の報告。 執筆者：上田和子、野畠理佳 担当部分：4.6を中心とした該当部分
12.2018年度日本語教育 関連活動の報告	共	2019年3月 20日	『武庫川国文』第 86号 (武庫川女子 大学国文学会) pp. 45-52	2018年度 日本語日本文学科における日本語教育関連科目で実施し た活動の報告。 執筆者：上田和子、野畠理佳 担当部分：4-3、4-4の一部および全体的な修正
13.『まるごと 日本の ことばと文化』を主 教材とした専門日本 語研修のコースデザ インと成果 (査読 付)	共	2017年3月	『日本語教育紀 要』第13号 (国際 交流基金) pp.55- 70	国際交流基金関西国際センターで実施されている外交官・公務員研 修においては主教材を『みんなの日本語』から『まるごと 日本の ことばと文化』に変更した。それに伴う新たなコースデザインおよ び各科目のデザインと実践を報告し、研修の成果としてテスト結果、自己評価、満足度および教師の気づきについて述べた。 執筆者：羽太園、野畠理佳、東健太郎、戸田淑子、安達祥子 担当部分：主に「3.4.3各科目のデザイン」の「(1)活動」を執筆、 その他全体的な修正を行った。
14.短期訪日研修にお ける学習者の気づきの 要因の分析 (査読 付)	共	2015年3月	『間谷論集』第9号 (大阪大学 日本 語・日本文化教育 研究会) pp.27-48	大学生を対象とした短期訪日研修において、学習者の語りから、気づきが何をきっかけに得られたのかを探るためSCAT分析を行い、気づきの要因を抽出した。学習者の気づきには学習環境など来日前の潜在的な要因と、実際の体験や内省の機会といった来日後生じた要 因があり、学習者は来日後に自己と向き合う機会を通じて新たな価 値観や文化的視点を得ている。 執筆者：野畠理佳、和泉元千春、市岡香代
15.「活動記録」にお ける学習者の文化認識 に関する一考察 一 学習者の異文化理解 へのかかわりを目指 してー (査読付)	単	2012年3月	『国際交流基金日 本語教育紀要』8号 pp. 41-51	学習者の異文化理解にかかわるための教師の役割について考察する ことを目的に、試行的調査として「学習者訪日研修(大学生)」に おける自律学習支援のきっかけの一つである「活動記録」から、学習 者が文化認識にかかわるどのような記述を行ったかについて分析、 「異文化間能力」を構成する要素に関する記述を取り上げて考察 した。
16.国際交流基金レポー ト(10)「アカデミック・ ジャパニーズ指導を を目指した初級か らのコースデザイン ーアジア・ユー ス・フォローシップ 高等教育奨学金日本 語研修の実践から」	共	2010年9月	『日本語学』2010 年9月号 (明治書 院) pp. 76-85	国際交流基金関西国際センターの専門日本語研修の蓄積を生かした 研修として「アジア・ユース・フェローシップ高等教育奨学金日本 語研修(AYF研修)」のコースデザインを紹介し、実践を通じて得ら れてきた共通認識を報告。 執筆者：野畠理佳、和泉元千春、三浦多佳史
17.夏休み子どもワーク ショップ 「世界中 の仲間といっしょ に」 一関西国際セ ンター研修参加者と 小学生を対象とした 国際理解ワーク ショップの実践記録 ー (査読付)	共	2009年3月	『国際交流基金日 本語教育紀要』第 5号 pp. 181-187	国際交流基金関西国際センターの各研修で実施している小学生との 交流事業において、通常の国や遊び、歌等を紹介する活動ではなく、 研修参加者と子どもたちが体験を共有し協働する過程において 多様性に気づき、共感し、共に創造する楽しさを感じることによつて 国際理解の感覚を得られるような場「夏休みこどもワークショップ」を企画。その実践を報告。 執筆者：今井寿枝、品川直美、野畠理佳
18.自律学習支援を目指 した学習相談の内省 的観察 (査読付)	共	2008年3月	『間谷論集』第2号 (大阪大学 日本 語・日本文化教育 研究会) pp.83- 108	「日本語学習者訪日研修(大学生)」の自律学習支援として実施さ れる「学習相談」(教師と学習者の1対1で行う学習カウンセリン グ)について、実際のやりとりを文字化した資料をDIE法を用いて分 析し、教師の役割について内省的観察を行った。 執筆者：野畠理佳、和泉元千春
19.タイにおける中等学 校日本語教員養成講 座の概要と追跡調査 報告：タイ後期中等 教育における日本語	共	2006年8月	『世界の日本語教 育』第16号 (国際 交流基金) pp.169 -187	タイの中等教育レベルの学習者数の著しい増加につながった、中等 学校日本語教員養成講座の概要を述べ、修了生への追跡調査報告の 結果を踏まえて後期中等教育の日本語クラス開講の現状と現場に立 つ日本語教員の現状を報告。本講座参加者は、教員養成講座を修了 した後も、訪日研修や各地で開催される研修、通信による学習など

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
クラスの現状 (査 読付)				の研修に参加し、継続的に学習を続けることによって教員としての自信を深めている。 執筆者：野畠理佳、ウイバー・ガムチャンタコーン
20. 海外の日本語学習者 への支援—国際交流 基金関西国際セン ターの現場から 第 5回「日本語研修にお ける図書館実習の役 割—海外司書日本語 研修における図書館 実習一」	共	2003年5月	『日本語学』2003 年5月号 (明治書 院) pp. 76-86	本稿では、国際交流基金関西国際センターで実施した司書日本語研修概要を報告した。同研修においては「日本の図書館事情を理解し専門知識を深める」「職務に必要な日本語を実践的に学ぶ」ことを目的に図書館実習を行っている。 執筆者：金秀芝、野畠理佳
21. 会話における聞き手 の参加 ～聞き手によ る相づち的な発話に ついて～	単	1998年	『北陸大学紀要』 第22号 (北陸大 学) pp. 419-429	日本語学習者および母語話者の自由会話を資料としてfloorの構造を観察し、聞き手がどのように話し手のfloorを支えているのか分析を行った。(本稿は修士論文「対話における聞き手の言語行動につい て 一聞き手としての技術の指導一」の一部をまとめたもの。)
22. 聞き手による言語行 動と対話の展開につ いて	単	1995年	『日本語・日本文 化研究』第5号 (大 阪外国语大学日本 語講座) pp. 69-79	本稿では、従来の相づち以外に何らかの実質的な内容を含む聞き手の反応を「相づち的な発話」とし、聞き手による「相づち的な発話」が対話の展開に影響を及ぼしているという点を母語話者および中上級の日本語学習者の自由会話の分析を通じて述べた。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 日本語・日本文化 尼日国際シンポジウ ム		2010年3月	大阪大学 日本語・日本文化 教育研究会	コメンテーターとして参加
2. 日本語・日本文化 タイ日国際シンポジ ウム 一研究者・高度 職業人育成における 日本語教育の役割一		2008年3月	大阪大学、日本 語・日本文化教育 研究会	パネラーとして参加 『日本語・日本文化 タイ日国際シンポジウム 一研究者・高度職業人育成における日本語教育の役割一』(2008年7月)に抄録が掲載
2. 学会発表				
1. 言語ヒストリーは、 セルフスタディと言 えるのか(1) ー日本 語教師による日本語 教師研究と日本語教 師教育者の専門性開 発のためにー	共	2025年3月 15日	日本語教育学会 2024年度第4回支 部集会(関西)	日本語教師による日本語教師研究として開発された言語ヒストリーが日本語教師教育者の専門性を開発するために資するかどうか、教師教育分野で定評のあるセルフ スタディの視座から、その可能性を考察した。その結果、完全に一致することはものの、LHが日本語教師教育者の専門性を開発するための研究方法論として十分に可能性があることを明らかにした。 発表者：小林浩明、上田和子、和泉元千春、野畠理佳 <共同研究者>齊藤真宏(旭川市立大学)
2. 日本語教師による オートバイオグラ フィーの実践と考察 ー日本語教師の 「ことば」をめぐる 経験の語りからー	共	2023年11月 19日	第13回 国際日本語 教育・日本研究シ ンポジウム(香 港)	日本語教育に携わるIを含む3名が、「言語ヒストリー(LH)」「言語ポートレイト」を元に行ったオートバイオグラフィーとしての語りを観察した結果から、ある日本語教師の内的キャリア形成がどのように捉えられたかを報告。教師の権威性や複言語性、母語喪失について気づき、言語観、ネイティブ性や母語話者教師というアイデンティティを再構築していくという内的キャリアの意識化が見られた。 発表者：和泉元千春、野畠理佳、小林浩明
3. ポスター発表 日本 語教師研究としての 「言語ヒストリー (LH)」の実践 (2) ーテキストマ イニングによるLHの 分析	共	2022年11月 6日	日本語教育学会 2022年度秋季大 会	「日本語教師」になる内的プロセスを明らかにすることを目指し、教師自身の言語学習に焦点を当てた言語ヒストリー(LH)を用いた協働実践を行っている。4名の日本語教師のLHの実践のうち「個人のLH記述」について、大量データから新たな知見を得るためのテキスト分析の一手法であるテキストマイニングを実施した。本発表はその結果を報告。 発表者：小林浩明、和泉元千春、上田和子、野畠理佳
4. 口頭発表 日本語教 師としての「言語ヒ ストリー(LH)」の実 践	共	2022年3月6 日	言語文化教育研 究学会 第8回年次大 会	日本語話者が日本語教師になっていく内的プロセスを明らかにすることを目指し、日本語教師の経験を振り返る「言語ヒストリー」を実践した。その実践の経過報告と、手法の可能性についての検討。 発表者：上田和子、小林浩明、和泉元千春、野畠理佳

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
5. ポスター発表 何が学習者の文化的気づきを深化させるのか－短期訪日日本語研修における実践から－	共	2012年8月	2012年日本語教育国際研究大会 (於:名古屋大学)	大学生を対象とした短期訪日研修では、体験を通してさまざまな文化的気づきが生まれる。このような気づきは学習記録の記述など内省を促す機会を通じて意識化されている。しかし、実際には学習者の気づきがうまく深化する場合と深化しない場合が見られる。本研究では学習者へのインタビューを行い、なぜそのような違いが生じるのかについて考察した。 発表者:野畠理佳、市岡香代、和泉元千春
6. ポスター発表 大学生短期研修における学習者の文化認識	共	2012年3月	日本語教育方法研究会(JLEM) 第38回研究会 (於:国際基督教大学)	大学生を対象とした短期訪日研修では、自律学習支援の枠組みにおいて個々の学習者の日本語および文化社会についての気づきの記録を促し、それをクラスで共有する機会を設けている。本発表では、短期間の滞在において学習者がどのように文化を認識したかを探るため、インタビューを実施した結果を報告した。 発表者:野畠理佳、市岡香代
7. 口頭発表 「論理的表現力養成を目指したディスカッションクラスの試み－初中級を対象としたアカデミック・ジャパンニーズ指導実践」	共	2009年8月	日本語教育学会実践フォーラム ラウンドテーブル (於:早稲田大学)	発表では、初級からのアカデミックジャパンニーズ養成の一環として、初級後半～中級前半レベルを対象とした基礎的なディスカッションクラスの実践と学習者と担当講師に聞き取りを行った結果について報告した。 発表者:野畠理佳、和泉元千春、川嶋恵子
8. 協働・創造を取り入れた異文化間交流の試み－小学生と留学生を対象としたワークショップの実践より－	共	2009年6月	日本国際理解教育学会研究大会 (於:立命館大学)	本発表では、日本語学習者と子どもたちの交流のためのワークショップの実践を報告した。ワークショップで目指した点は(1)「外国」対「日本」の2項対立の図式を緩和すること (2)「協働・創造」の過程を取り入れ、共に手を取りあい1つの目的に向かう「協働」の過程で、多様性に気づき、背景の異なる他者を仲間として認め、共に「創造」する楽しさを体験できるような場、相互理解の出発点となるような交流の場を実現するという点である。 発表者:今井寿枝、野畠理佳
9. 口頭発表 自律学習支援を目指した「学習相談」における教師の内省－内省的事例の観察－	単	2007年3月	日本語日本文化研究会 (於:大阪外国語大学)	「日本語学習者訪日研修(大学生)」の自律学習支援として実施される「学習相談」(教師と学習者の1対1で行う学習カウンセリング)について、実際の談話をDIE法を用いて分析し教師の行動について内省的に観察した。教師は学習者との認識のズレを修復するための交渉に着目。 発表者:野畠理佳 (共同研究者:和泉元千春)
10. 「学習相談」における教師の役割に関する一考察	共	2006年10月	日本語教育学会秋季大会 (於:熊本県立大学)	自律学習支援の一環として行われている「学習相談(学習カウンセリング)」のやりとりをマイクロカウンセリング技法の観点から分析し、評価的な視点で「学習相談」における教師の役割を考察した。 発表者:和泉元千春、野畠理佳
11. 自律学習支援としての「学習相談」における教師の役割	共	2006年4月	平成17年度国立国語研究所 上級研修修了発表会 (於:国立国語研究所)	「学習相談」での教師の関わりを学習者の言語学習上の問題解決プロセスの観点から考察し、そこから研修改善のための情報を得た。「学習相談」の関わりについて教師と学習者のやりとり、また教師の行動の意図を分析。 発表者:和泉元千春、野畠理佳
12. 口頭発表 オーラルテスト評価基準改訂－外交官・公務員日本語研修の場合－	共	2005年9月	第7回日本語教育学会研究集会 (於:龍谷大学)	外交官・公務員研修において口頭運用能力の最終試験として開発してきたオーラルテストに関し、評価基準の改訂に向け改評価者間での最初の評価の異なりの調査、また評価者へのアンケート及びインタビューにより検証を行った結果を報告した。 発表者:田中哲也、岩澤和弘、石井容子、野畠理佳
13. 丁寧さ(ポライトネス)指導における試み～映画を使ったブレインストーミングの実践	単	2003年3月	タイ国日本語教育研究会年次セミナー (於:バンコク日本文化センター)	本発表では、中上級レベルの学習者を対象とした丁寧さ(ポライトネス)の指導に関する提案を行った。寅次郎シリーズの映画を用い、主人公である寅さんが敬語を使わずにポライトネスのレベルを維持するいくつかの場面を視聴することで、ポライトネスに関する理解を深めようとする試みについて報告した。
14. 口頭発表 対話における聞き手の言語行動～相づち的な発話による聞き手の参加～	単	1998年	平成8年度日本語教育学会春季大会 (於:筑波大学)	日本語学習者との対話においては、相づちを母語話者と同じ程度の頻度で使用しているものの、聞き手としての反応が不自然に感じることがある。その原因を調査するため、日本語学習者と母語話者の聞き手がどのように話に参加しているのかを観察した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 「日本語教師の言語ヒストリー（LH）—ことばをめぐる経験・実践そして研究へ」	共	2025年3月16日	科研費研究成果報告会 公開シンポジウム	JSPS科研費（21K00617）研究テーマ「日本語教師研究手法としての言語ヒストリーの検証」（2021-2024）の成果公開として、「言語ヒストリー（LH）」の実践例を紹介し、日本語教師自身による教師研究として、研究成果について報告。Self-Study研究との関連について触れつつ、LHを書くことについて参加者と話し合う機会を持った。 共同発表 研究代表者：上田和子 研究分担者：小林浩明、和泉元千春、野畠理佳 招待講演者：齋藤真宏（旭川市立大学経済学部 教授） ボストコロナ時代の言語学習、AIと日本語教育の関わり、日本語教員の国家資格化について3名の大学教員による鼎談の報告（自身は司会者として参加）。 鼎談者：實平雅夫、今西利之、藤平愛美 司会：野畠理佳
2. 座談会報告 変化する日本語教育の風景：ポストコロナ時代の言語学習とAI、日本語教員の国家資格化を踏まえて	共	2025年3月	『間谷論集』19号 日本語日本文化教育研究会	
6. 研究費の取得状況				
1. 科学研究費 基盤研究 (C) 21K00617	共	2021年		日本語教師研究手法として言語ヒストリーの検証 研究代表者：上田和子 分担者：小林浩明、和泉元千春、野畠理佳
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			
1. 2025年4月～2026年3月 2. 2023年4月16日～現在 3. 2020年4月～現在 4. 2016年9月～現在 5. 2015年～現在 6. 2008年4月～現在 7. 2008年4月～現在 8. 1996年～現在	武庫川女子大学架橋的重点共同研究・グローバル共同研究支援 大学日本語教員養成課程研究協議会 会員 日本質的心理学会 会員 言語文化教育研究学会 会員 異文化間教育学会 会員 日本語プロフィシエンシー研究学会 ジャーナル編集委員 日本語日本文化教育研究会（大阪大学） 運営委員 日本語教育学会 会員			